

日本古代史

私の仮説

(神武東征と天孫降臨)

日本古代史ネットワーク

浅野 登

仮説 その1 「神武東征」は2回あった

- ・ 日本書紀には日本の国の始まりとして、九州勢力（神武天皇）が日向を出発し、瀬戸内海を東に攻め上り、大和地方を制圧したと書かれています。いわゆる「神武東征」です。
- ・ 私は、これが2回あったと考えます。
- ・ 1度目はAD260年頃、北部九州の勢力による東征です。
- ・ 2度目はAD290年頃、南部九州勢力による東征です。

まず、最初の東征について私の仮説を以下に記します。

- ・北九州の勢力は BC210 年頃、徐福一行が集団亡命してその基盤を作り上げたものと考えます。
- ・徐福一行は中国江南地方を出発し、東を目指した。
- ・3000 人の若者や工人を伴い九州西岸に漂着。徐福本隊は有明海を北上し現在の佐賀県南部に上陸したと考えられます。
- ・佐賀市南部にはこれを伝える伝承や地名が多数存在し、佐賀市は徐福を顕彰する施設（徐福長寿館）を 1999 年に建設しています。
- ・この徐福一行がこの地域を開拓し、当時縄文末期であった当地方に金属器や稲作などを持ち込み、縄文から弥生へ導いたと考えます。
- ・その子孫が築いた中心村落が「吉野ヶ里」です。また、人口の増加に伴い、周辺に村落が増えていきました。（後に国と呼ばれるものです）

- このうち早期に力をつけたのが、博多湾沿岸の「奴国」です。
- 奴国は1世紀中ごろには、中国（当時は漢）に使節を送ることができるほどでした。（志賀島から1784年に出土した金印はその証拠です）
- 2世紀後半から南部の筑後川周辺の国々が力をつけ、日本書紀にある倭国大乱の時代となります。
- 奴国はこの南部の国々（邪馬台国連合）に敗れ、当時の国王は金印を持参して逃亡、途中の志賀島に隠匿したと考えます。（逃亡先は対馬か）
- 一方、当時中国は三国（魏、呉、蜀）時代で、最も力のあったのが魏の国でした。
- 邪馬台国連合も中国の後ろ盾が必要であり、AD238年頃、魏に朝貢し魏から金印や鏡100枚を賜っています。

- ・ そのお返しとして、240年には帯方郡太守弓遵（きゅうじゅん）が部下を倭国へ派遣し、詔書と印綬を倭王に与えています。
- ・ さらに、邪馬台国連合はAD243年には大夫ら8人を魏に派遣し、生口や倭錦を献上するとともに、女王国と狗奴国との戦争が近いことを報告したとみられます。
- ・ そこで、245年には魏から詔が発せられ、倭の難升米は帯方郡経由で黄幡を賜った。（この時点で魏は卑弥呼を見限り、難升米を当事者とした。）
- ・ 247年には帯方郡は郡の下級官吏である張政らを倭国に遣わせた。
- ・ 実質は軍事顧問団とみられる。その団長が張政です。
- ・ この時、卑弥呼はすでに霊力が衰えていたことから、魏からの顧問団の張政らにより自死を求められ、それに従ったとみられます。（AD248年か）
- ・ 卑弥呼の墓（塚）はそれなりのものが作られました。（その存在位置は不明）
- ・ あとを継いだ男王では邪馬台国連合はうまくいかず、再び女性の巫女

「台与」を卑弥呼の後継とすることで邪馬台国連合が合意。

6

- このころには、食料事情も良くなり人口の増加が顕著になりました。
- 北九州エリアでは新たに農地の開発などが限界を迎えたと思われる。
- そのころ、はるか東に広大な土地の存在を知り、邪馬台国連合は魏の顧問団張政らの支援を受けて、東征の準備を始めました。
- 考古学者の森 浩一同志社大名誉教授はその著書（「倭人伝を読みなおす」）の中で、「東征は魏から来た張政が立案または推進したのではないか」と表明されている。
- 当時の中国（魏など）の軍事力は強大で、大陸に近い北九州はその脅威にさらされ続け、その脅威からできるだけ離れることも東征の動機であったと思われます。
- そして、AD260年頃、邪馬台国連合は東征に出発したと考えられます。（森名誉教授は著書で250年代の可能性が高いと言っておられる）

- ・東征が完了した後の 266 年に、台与は魏から代わって建国したばかりの晋に 20 人からなる大使節団を派遣し、張政らを送り届けた。
- ・張政の倭国滞在は 19 年に及ぶ。

次に、2 回目の東征について私の仮説を述べます。

- ・この 2 回目の東征の詳細を述べる前に、以下のことを知っていただく必要があります。
- ・日本書紀では神武東征の出発地は「日向」とされており、この日向を南九州の日向（現在の宮崎県）とする説と、そうではなく「ひむか」という別の地とする説があります。
- ・私は南九州の日向として仮説を進めます。

- ・ さらに、その勢力については、竹田昌暉 (たけだまさあき) 氏が 1997 年に発表 (徳間書店「神武は呉からやってきた」) した説を支持します。

竹田昌暉氏：東京大学医学部卒の医師 元東京虎の門病院麻酔科部長

日本刀の研究から日本古代史の研究者となる

仮説 その2 2回目の東征は呉国王族よってなされた

- ・ その説 (仮に「呉国王族亡命説」とします) の概要は次のとおりです
- ・ 中国三国時代の AD280 年に呉の国が魏の後裔「晋」に滅ぼされました。三国志呉書には滅亡時のことが次のように記載されている。

- ・呉は後漢の末期、江南の地に土豪の孫堅が台頭。その子の孫策が江南一帯を平定し、その死後に弟の孫権が継承した国です。
- ・孫権ははじめ蜀の劉備と連合して、有名な「赤壁の戦い」(208)で魏の曹操を破り、ついで劉備の部下の関羽から荊州(けいしゅう)を奪って、北の魏、西の蜀に対抗した。
- ・孫権は魏の曹丕(そうひ)の代に呉王に封ぜられたが、AD220年には独立し、建業(現在の南京)を都として222年には呉王朝を創始した。
- ・三国鼎立時代の始まりである。
- ・そして、この後まず263年に魏が蜀を滅ぼし三国鼎立は終焉するが、その魏はクーデターによって実権を握った司馬氏にとって代わられ265年には西晋王朝が始まった。
- ・孫権の呉国は三国の中では一番長く命脈を保ったが、その孫権の呉が倭国と接触したとの記録はありません。

- ・ 呉書¹の天紀4年（AD280年）戊辰の章に、次の記載があります。
- ・ 西晋は蜀の軍船を使い、長江（揚子江）上流から呉の攻略を開始。
- ・ 呉軍は西晋の大兵力に敗北を重ね、首都建業（南京）ももはや陥落かと思われた同年4月戊辰に、呉の将軍 陶濬（とうしゅん）が武昌から戻り、最後の呉王孫皓（そんこう）に「私に2万の兵と大型艦船をお貸してください。必ず叩き潰してみせます」と進言。
- ・ 呉王孫皓はただちにその策を受け入れた。
- ・ ところが、呉書のその後には「明日当発 其夜衆悉逃走」が出てくる。
- ・ すなわち、呉国の命運を賭けた最後の決戦前夜に、武器を満載した2万人の呉の大水軍が忽然と消えたのです。
- ・ つまり、呉の王族（孫氏）はその軍船と兵士2万人を率いて、日本に

- ・出発地は建業（現在の南京）であり、東シナ海を東に進めば、黒潮に乗り 10～15 日程で九州に到達できる。（距離は約 900 km）
- ・呉軍は優秀な水軍を有しており、軍船は多数ありました。
- ・呉王族（孫氏）は西晋との決戦より、日本（当時は倭国）への亡命を選択したのです。

- ・その到着地が南九州の日向（現在の宮崎）と考えられます。
- ・呉の王族が当初、亡命先と考えたのは「出雲」だと思われます。
- ・その証拠が「出雲の国譲り」の伝承です。
- ・集団亡命に先立つこと数年前、呉の先遣部隊が船団を率いて出雲の稲佐の浜に到着。王族の集団亡命の受け入れと国譲りを交渉しに来たと思われます。

- ・亡命先に**出雲**を選んだのは、当時すでに北九州は「**邪馬台国連合**」があり、南九州には**狗奴国**があることを呉国は知っており、あえて避けたと思われる。
- ・出雲は呉の圧倒的な軍事力を見せられ、**大国主命**は戦わずして降伏。
- ・その時の降伏に伴い、出雲軍は再起に備え武器（銅剣 358 本）を荒神谷の地中に隠した。（決して埋納ではない）
- ・ただし、事前交渉にきた呉軍一行は**大国主命**に籠絡され、呉には戻らなかったと思われる。
- ・その後、呉の状況はさらに悪化し、先述したように**280年**に滅亡しました。
- ・その際、呉王族一行は亡命先として先に交渉した倭国（出雲）を目指したと思われます。

- ・ 建業から長江を経て、東シナ海へ出ると沖合には黒潮の流れがある。
- ・ 黒潮はフィリピン沖から台湾の東を通り、東シナ海を北上して、九州の南で本流は太平洋側へ。一部は対馬海流となって日本海に流れている。
- ・ その速度は時速 1.5～2 ノットと言われており、換算すると約時速 3km 前後です。
- ・ 建業から九州までの距離は約 900km ですから、黒潮に乗れば約 13 日程度で日本近海に到着します。
- ・ しかし、その際王族の船団は、出雲方面への海流（対馬海流）に乗り損ね、黒潮本流に乗ってしまったとみられます。
- ・ つまり、日本海側ではなく太平洋側に到着し、日向に漂着して上陸したものだと思われます。
- ・ 当時の南九州（日向の地）は狗奴国の領域だったと思われませんが、呉軍の圧倒的軍事力により、たちまち平定されました。

- ・つまり呉王族の「孫氏」が日本（倭国）に来訪したことから、後の日本書紀の「天孫降臨」の記述になったと思われます。
- ・当初の目的地ではなかったものの、倭国への集団亡命に成功した呉王族は、その後しばらくは、中国（当時は西晋）の様子を探りつつ、倭国全体の把握に努めたでしょう。
- ・集団亡命が西晋に悟られなかったと確信した呉王族は、「倭国制覇」という新たな目標を掲げ、10～15年はその軍事力の増強と他の地域の情勢把握に邁進したと考えられます。
- ・そして、倭国の状況が分かり、軍事力も整備されたことから、倭国制覇という目標実現のため AD290 年代に東征したと考えられます。
- ・宮崎には「西都原古墳群」とさらに古い「生目（いきめ）古墳群」（最も古い

古墳は3世紀後半とされている)があり、その傍証となる。

15

- ・日本書紀に記載された東征の経路が、日向を出発して、いったん北九州の岡田宮（岡湊神社）に寄り道して、その後瀬戸内海を東進したとされるのは、1回目と2回目の東征の記憶が重なってしまったと思われる。

仮説 その3 日本書紀にある「天孫降臨」とは中国から
亡命した孫氏の記憶と元明天皇、藤原不比等の孫（聖武）の即
位を待ち望むもの

- ・この東征の記憶はその後の人々に受け継がれました。

- ・その後（約 400 年後）、飛鳥時代に天武天皇の命により日本の古代を記す「日本書紀」が編纂されることとなりました。
- ・日本書紀は中国（当時は唐）に対して、我が国の歴史を示すための歴史書であり、編纂は長時間を要した。まとめられたのは **AD720 年**。
- ・当時の天皇は天武と持統の息子草壁皇子の妃であり、天智の娘の元明天皇。また実力者は藤原鎌足の息子不比等でありました。元明は息子の文武（妃は不比等の長女宮子）が早世（25 歳）したことから、孫の首皇子（当時 7 歳 後の聖武天皇）が成長するまでの中継ぎの天皇として即位。
- ・日本書紀は編纂が完了した 720 年に元明天皇に献上された。
- ・つまり 720 年は、元明と不比等は聖武が成長するのを待っているときである。（当時聖武は 19 歳）
- ・ついで聖武の姉が、元正として即位し、聖武の成長を待った。

- ・元明と元正はともに天智、天武の両方の血筋を引くことから即位に至ったと考えられる。(当時は血筋が極めて重視された)
- ・藤原不比等は天皇家の先祖が呉国王族(孫氏)であることを秘匿しながら、聖武(元明、不比等の双方の孫)の成長を待つ元明に「天孫降臨」という元明の喜ぶストーリーを作ったと考えられる。
- ・724年晴れて聖武は即位し、2人(元明と不比等)の孫が天皇となった。
- ・以上が私の考える「日本古代史 3つの仮説」です。